

看護学生のための「半構成方式」研修型エンカウンター・グループのファシリテーションに関する一考察

篠原, 光代
九州大学大学院人間環境学府

野島, 一彦
九州大学大学院人間環境学研究院

<https://doi.org/10.15017/10280>

出版情報 : 九州大学心理学研究. 8, pp.155-163, 2007-03-31. 九州大学大学院人間環境学研究院
バージョン :
権利関係 :

看護学生のための「半構成方式」研修型エンカウンター・グループのファシリテーションに関する一考察

篠原 光代 九州大学大学院人間環境学府
野島 一彦 九州大学大学院人間環境学研究院

A study of facilitation of "Semi-Structured style" seminar encounter group for nursing school students

Mitsuyo Shinohara (*Graduate School of Human-Environment Studies, Kyushu University*)

Kazuhiko Nojima (*Faculty of Human-Environment Studies, Kyushu University*)

In this study, "Semi-Structured Style" encounter group, which was an intermediate model of Unstructured type and Structured type, was used as a training type encounter group for a known group of nursing school students. The original development process of Semi-structured style and devices of the facilitation were discussed. It was summarized to following three points when I compiled a conclusion of this report. (1) "A Semi-Structured style" develops by choosing assembling of "the theme" that is the characteristic while grasping a characteristic and a state of a member. (2) A development process passed through expression of the perplexity, development of mutual trust, establishment of a close degree, deep mutual relations and self confrontation, but it became clear that expression of dissatisfaction for structure continued being had. (3) That a response method was effective a theme notice, the next-door houses on both sides as well as frank, appropriate self-disclosure and polite introduction was suggested.

Keywords: Semi-Structured style, seminar encounter group, nursing school students

1 はじめに

エンカウンター・グループ (Encounter Group; 以下 EG) とは「個人の成長, 個人間のコミュニケーションおよび対人関係の発展と改善」(Rogers, 1970) を目的にした集中的グループ体験である。1970年に最初の EG が日本で実施され, 以来精力的に実践と研究が展開されている。近年では教育領域において構成的 EG が多く行われ, もともと未知集団において行われることが多かった EG だが, 既知集団における EG も盛んに展開されてきている。既知集団における EG とは見知らぬもの同士ではなく, すでに顔見知りの者が参加して行われる EG であり, 学校現場での人間性教育として, また専門職養成のための体験学習として, さらに職場での人間関係の研修として実施され, メンバー個人の心理的成長だけでなく, グループ全体すなわち仲間関係などの変化にも目標がおかれている (安部, 2006)。その中でも, 看護学校での EG は専門職養成のための体験学習として熱心にとりくまれ, 既知集団の研修型 EG としては長年実践が積み重ねられている領域であると言えよう。

しかし, 未知集団で行われる EG が自発的に参加するものであるのとは対照的に, 既知集団で行われる研修型 EG は義務付けられた参加であるため動機付けが低いと言われている (平山ら, 1994)。既知集団で行われる研

修型 EG では未知集団で行われる自発参加型とは異なる独特のプロセスとファシリテーションの困難さがあり, サブ・グループ化, 体を動かすことやゲームへの欲求, 雑談が多いなどの行動化があらわれることが指摘されている (平山ら, 1994)。ここで, 看護学生への研修型 EG が自発参加型 EG と異なる点は, ①メンバー (以下 Me) が学校側によって参加させられており, 動機付けが高くないこと, ② Me が全員既知のクラスメートであり, 日常生活への影響があることが予想されること, ③ Me のほとんどが EG 初参加であり, 何をするのかかわからず不安が高いこと, ④ Me 全員が青年期であり, 特有の難しさを抱えていること, ⑤等質性集団であるため, 相互交流がおきにくいこと, などがあげられるだろう。中田 (2001) は研修型 EG に起きやすい行動化を逸脱行動と呼び, ファシリテーターが自らの否定的感情の自己開示を行う工夫を実践している。また平山ら (1994) は研修型 EG で通常の EG の様に自己理解・他者理解を目指すのか, どのような方向性でファシリテーションをするのかという問題は臨床的に大変重要だとし, 構成課題を初期に入れ, ファシリテーターがリーダーシップを担うことによって, 「させられ感」を低減させることができると述べている。つまり, 既知集団における研修型 EG においては, 動機付けの低さなどの特有の難しさを意識した安全感の高いファシリテーション, グループの構造が

必要になってくる。

そこで、森園・野島(2006)は「テーマの設定」と「セッション中のMe全員の発言」という特徴を盛り込んだ、非構成型(Unstructured)でもなく、構成型(Structured)でもない「半構成方式」という新しい方式での研修型EGを試み、その特徴、有利性、限界について述べている。「半構成方式」とは、①非構成型と同様、10人前後の同じMeによって全セッションを行う、②各セッションのテーマを決め、そのテーマに沿ってグループは展開される、③テーマやグループの進め方は、グループの展開によって柔軟に変更される、④1つのセッションで全員が発言する機会を与えるというように、Meの編成や場所、スケジュールなど基本的には非構成型と同じ形態をとりながらも、「テーマの設定」と「セッション中のMe全員の発言」という構成的な要素を含むEGを指す。森園・野島(2006)は村山・野島(1977)のEGプロセス発展段階と比較しながら、半構成方式独自のグループプロセスを丁寧に見ていくことが必要だと述べている。しかし、彼らはグループの構造に焦点をあてているために、ファシリテーターがどのようにグループやメンバーと関わっていくかという記述が十分ではない。半構成方式はその構造が独特であるため、構成的、非構成的EGとは異なるファシリテーションが必要であり、その工夫を従来のEGと比較しながら述べることは、半構成方式の幅広い領域での実践にもつながるだろう。

よって、本稿では半構成方式を用いた看護学校の研修型EGの経過を報告し、半構成方式独自のプロセスと、半構成方式によるファシリテーションの工夫について考察し、研修型EGへのファシリテーションについて有効な手段を提案することを目的とする。

II グループ構成

1. グループの位置づけ

このグループは、某看護学校の2年生を対象として、年度末に学外研修施設において集中合宿形式〔2泊3日、7セッション(以下Sと略記)]で実施された研修型のEGである。1クラス45名を無作為に4グループに分け、それぞれにファシリテーター(以下Facと略記)とコ・ファシリテーター(以下Coと略記)が1名ずつつき、4グループが同時進行し、すべて「半構成方式」で行った。実施要領に記されたグループの目的は、「人格と人格のふれあいの体験を通して、自己に目覚め、豊かな人間関係の基盤をつくる」であった。

2. グループ編成

Meは12名(以下の文中ではA~Lで表記する。全員女性で平均年齢は20.67歳(SD=1.07)、EG経験は全員な

かった。このうちFは心療内科通院中、KとLは留年生、Lは軽い摂食障害ありとの事前情報があった。Fac(大学教員、50代男性、ファシリテーター経験豊富)、Co(20代女性、Me経験はあるがファシリテーター経験は初めて)の14名で構成された。

3. リサーチ

Me全員に対して、グループ開始前、終了後に参加意欲や期待度、満足度などを記入する「参加者カード」、各セッション終了後にグループの動き、自分の動き、ファシリテーターについて、満足したこと、気がかりについてなどの感想や魅力度を記入する「セッション・アンケート」の提出が求められた。またEG参加3ヶ月後に、「フォローアップ・アンケート」への記入を求めた。参加意欲度、期待度、満足度、魅力度、有意味度はいずれも「1:全く感じない」~「4:どちらでもない」~「7:非常に強く感じる」の7段階評定である。

III グループの経過

1. 参加前の気持ち

Meのグループ開始前の参加意欲、期待度の平均値は、それぞれ3.33(SD=1.30)、3.42(SD=0.99)。自由記述では、F「何をするのか全くわからないので意欲がわきません。忙しい時期に来たので、準備もできないまま来てしまって憂うつです」など、何をするのかわからないことによる不安(B,C,D,F,G,H,J,K)や、B「前の先輩達は泣いた人もいると聞いたので、そうならないよう楽しく過ごしたい」など、先輩から聞いた内容からの不安(B,J)が述べられていた。しかし、不安の半面、楽しみにしている(A,D,H,K,L)様子も見られた。

2. グループのプロセス

本グループでは、野島・森園(2006)を参考に、対象者が看護学生の2年生であることを考え、彼等にとって身近で、そして大切なテーマであろう内容を吟味し、各セッションのテーマとして予め『EG参加への期待と不安』、『私の進路を巡る過去・現在・未来』、『野外EG』、『友人・異性・仲間』、『私のキーワード』、『家族』、『言葉の花束』を予定し、グループが展開していくにつれ、展開に沿って柔軟に変更していくこととした。また、それぞれのテーマについて各Meが必ず発言できるようにファシリテーターが時間をリードする立場をとることとした。以下、Meの発言は「」, Facの発言は<>, Coの発言は<>>と表記する。※はS後のファシリテーターのスタッフ・ミーティングの内容を示す。

●S1(1日目13:30~16:00):『EG参加への期待と不安』

Fac が今回の EG の説明をし、<自分に正直、素直、率直であればいい><人には「心のかさぶた」があり、まだ傷が残っていて話す時期ではないと思うこと、話したくないことは無理しないように>と比喻を用いながら丁寧に説明を行う。S1の主旨の説明をし、Fac は Co がタイムキーパーをすること、S1は一人5分間自己紹介・EG への期待や不安を話していくことを伝え、Fac からはじめ、時計回りでまわる。Fac が率直に現在の家族の状況と話したこともあり、自己紹介は家族の話が多くでる。Me からは自分がちゃんと話せるか不安であること、自己嫌悪・自己否定的になるのではないかと、グループで泣くことへの不安が語られる。Me が発言した後に Fac と Co が積極的にフィードバックする。A からは両親の離婚の話がされ、グループで何か言われて泣くのではないかと不安が語られ、ファシリテーターたちは自己開示が早いような印象を受ける。

Me の感想＝魅力度の平均は4.75(SD=1.06)。自由記述では、緊張したということが多く書かれており、不満なこととして、自分の気持ちが上手く表現できなかったことを書いている者が多い(B, C, G, I)。しかし記述からはもっと上手く話したいという気持ちが読み取れた。満足したこととしては、「みんなのこと、意外なことが聞けた(B, C, D, E, F, H, J, K)」ことと書いており、A は「不安なことが言えた」と記述していた。Me の半数がファシリテーターからの質問や一言、ファシリテーターがうなずいて聞いてくれるのがありがたかったと述べていた(D, E, F, J, K, L)。F と K は気がかりなこととして、次のテーマをあげ、A と I は発表したときの沈黙が嫌と感じていた。

ファシリテーターの感想＝Fac 「Me は率直に語っている。Co はタイムキーパー。適度な介入をしている。(6)」/Co 「盛り上がる感じはないがおちついているよう。Me が不安について言語化できてよかった。(5)」() 内は魅力度を示す。

※動機付けの低さのわりに、足を引っ張ろうとする人はいないよう。次のテーマが進路についてであり、年齢の近い Co が最初にした方がよいだろうと話し合う。

●S2 (1日目18:30~21:00): 『私の進路を巡る過去・現在・未来』

Fac がこの S のテーマを提示した後、<順番でまわすのと指名式でいくのとあるけれど>と提案すると、反応は薄いですが、Me は顔を見合わせながら後者に手をあげる。まず、Co が自分の進路について現在の迷いも含めて自己開示をする。すると、B は課題がきついこと、J は大学をやめて看護師を目指したこと、K と L は留年の経緯について語り、I は自分が頑張る性格であることと、成績がおちて先生に呼び出されたことを涙ぐみながら語る。その後、F が指名された直後から「涙が出る」と発言

し、入院中に接してもらった看護師さんを見て目指そうと思ったと話す。それとは対照的に、H は「お金をかせぐため」と語る。Fac, Co が Me に質問をしたり、感想をフィードバックするが、Me からは自発的に反応がない。

Me の感想＝魅力度の平均は5.33(SD=0.65)。自由記述では、S 1よりも緊張がとけたことや、だんだん慣れてきて自分のことも少しずつ話せたことに満足している記述が見られた。「悩んでいるのが自分だけではないことがわかってよかった」(A, L) という感想が見られた。また、G, H, K はグループに入り込めていない感覚を持っているようで、H は「話すのも聴くのもやはり疲れるなど思いました」と述べていた。しかし、J は「聞きたいと思うことがあっても、自分から口をはさんで質問することはできない」ことが心残り、L は「次からは自分から質問してみたい」と述べており、だんだん自発性がでてきている Me もいるようだった。

ファシリテーターの感想＝Fac 「Co の最初の自己開示は良かった。Me は積極的関わりがやや弱い? (5.5)」/Co 「コメントしすぎたか。Me 同士のやりとりが少ないことが気がかり。(5.5)」

※テーマが何なのか気になっている Me もいるよう。S4に予定している野外 EG についてテーマの発表をするなら以後もした方が構造の一貫性が保たれて良いだろうということで、S4以降のテーマについては前の S の終わりに発表することにする。

●S3 (2日目9:00~11:30): 『友人・異性・仲間』

Co が初めに友人と仲間の違いや異性の3つについて照れながらそれぞれ思いを話す。そして指名方式で話が進む。B は泣きながら「自分は嫌われているのではと思ってしまう。皆の中に積極的に入っていけない」と語り、A と J が「そんなふうにいるなんて知らなかった。そんなことないよ」と励ます。I は「結婚と恋愛の区別がよくわからない」、それをうけて J は経済力と結婚について意見を言う。H は過去の友人関係について具体的に友達の紹介をしながら話す。A は最近所属するグループで起こったこと、信頼関係が崩れた友人関係について真剣に語るが、Me からは反応がない。Me から自発的にフィードバックがでないため、ファシリテーターが感想を言いながら、発言者の隣の人に何度か話をふる。最後に Fac が自己開示し、次の S のテーマが野外 EG であることが発表され、<まずは一旦集まってどこに行きたいか話しましょう>と提案。

Me の感想＝魅力度の平均は5.67(SD=0.65)。自由記述で Me の発言に感想を言いたいができない(F, I)ということや、ファシリテーターの一言が嬉しい、自分の発言に周囲がどう思うか気になるという記述が見られた。「Co が照れながら正直に話したことで話しやすくなった」

(H, J), 「Facの一言のおかげでこれでいいのかなと思えた」(C, F)など、ファシリテーターの自己開示やフィードバックの影響も見られた。しかし、Aは「悩んでいた事を口に出せて満足したが、このことが原因でこれからの学校生活に支障がないか気がかり」と述べていた。また、GとJはもっと少人数のほうがいいという意見を記述していた。

ファシリテーターの感想=Fac「グループとしてのエネルギーが少し低下? (5)」/Co「重い内容の発言の後にMeから発言がでなさそうな雰囲気がある (5.5)」

※もっと少人数がいいという意見については、グループの動かなさに対する心の壁の問題であると思われた。時間を区切るCoも自分の気持ちに正直に申し訳なさを表現しながら伝えようと話しあう。

●S4 (2日目13:30~16:00):『野外EG』

Facがいろいろなコースがあることを提案し、どのコースにしようか尋ねる。Meは反応がうすいが、他Meをうかがいながら、下に下って、ソフトクリームを食べられるコースを選ぶ。Facを先頭に、小グループに分かれてわいわいと散歩し、おみやげやさんで輪になってソフトクリームを食べる。小グループに分かれてはいるが、まとまって行動している。戻ってきてからS5のテーマを伝える。

Meの感想=魅力度の平均は5.25(SD=0.87)。自由記述では、気持ちよかった、歩き疲れたという感想が見られ、Aは「運動できなくてなんか気持ち悪かったけど、すっきりした」と記述していた。Fは「次のSの内容を聞いて準備ができた」ことが満足と記述していた。ファシリテーターに関しては「室内での話し合いのときより身近に感じられた」(K), 「なじんでいた」(H)と書かれてあった。

ファシリテーターの感想=Fac「久しぶりの散策で後ろを見ながらゆっくり歩いた (5.5)」/Co「自然の中でゆっくりできた (5)」

※20歳前後の人が体を動かさないと7Sもたないよう。中間地点で野外Sをもつのはいいようだ。

●S5 (2日目18:30~21:00):『私のキーワード』

FacよりS5のテーマを伝え、Facが3つのキーワードとエピソードを話し、一つの特徴は長所にも短所にもなることを語る。<せっかく話して何も反応が返ってこないと悲しいから…話した人の両隣の人がレスポンスするようにしましょう>とFacが提案。話し終わってから両隣の人が一言感想や質問を言うことになる。Gは「最初は熱するけどすぐもういいやとなってしまう。こつこつやってみよう」と語る。Aは妥協、猫かぶり、いくらやってもむくわれないと自己否定的なキーワードを話す。Kの「怒ることがない」というキーワードに対し、隣のFacが<喜怒哀楽のうち喜怒哀楽は?>と質問。よくにこ

にこしていることが語られ、Lが「ほんわか雰囲気Kのいいところ」と伝える。Fはマイペースであること、ふわふわしたものや白いものが好きだと話し、Iは弟との葛藤を話す。MeはMeの話をしっかり聞いており、率直な感想が言えている。

Meの感想=魅力度の平均は5.08(SD=0.90)。自由記述ではみんなの意外なところと共通するところが知れてよかった、安心した、みんな自分のことをよくわかっていると聞いたという感想が多く記述され、他者理解が深まったようだった。「素直に話せて楽になった」(D), 「自然に話せてよかった」(H)と記述している者がいる反面、Aは人数の多さに対する不満、Iは自己開示の不全感を記述していた。Jは「意見をいうことを得意とする人がいないので、(あてられない限り)特定の人が話している気がする」と記述していた。

ファシリテーターの感想=Fac「Coはタイムキーパーと司会者をやってくれている (6)」/Co「皆、表現が苦手と言いながら、自分のことを考えて、自分なりに話せていて満足。両隣にあてるといのはすんわりいっている (6)」

※自己理解のテーマの魅力度は大体下がる。“人数が多く感じる”“部屋が狭い”という感想は客観的にというわけではなく、心の壁の問題であろう。

●S6 (3日目9:00~11:30):『家族』

Coから親や兄弟について話し、<私は長女だからこそがんばりやな性格にもなってきたと思う>と話す。その後の話でも兄弟との葛藤が多く話される。Hは父親に対するあきらめについて話す。初めて感情的に話したHに対して、両隣のFとGが「いつも一緒にいるけど知らないことだった。話してくれてうれしかった」と伝える。Gはお金と関連させて家族のことを話す。Meの話の深さとは対照的な印象。Iは兄弟が不登校だったこと、だからこそ自分はしっかりしなくてはと思い必死にがんばってきたことを涙を流して話す。隣のAから「がんばりやさんで、実習中にどんどんやせていく姿が心配だった」とフィードバックがなされ、Iはうなずきながら泣く。Aは親の離婚について、S1で話した事実部分だけでなく、自分がどんな思いを抱いていたかを話す。「兄弟の反応と自分の思いとの間にギャップがあり、とまどった」と話す。Bは母親の父母が亡くなり、落ち込んでいて心配と涙を流しながら話す。Lは父親とは仲が悪く、どう接していいかわからないと葛藤を話し、それを受けてJは「父親とは関係がいいが、母親の行動や考えていることがわからない」と率直に話す。両隣のレスポンスはテンポよく進み、Meは素直に感じた感想を伝えている。Meなりに自分が話せる内容を話した印象。Meの自己開示に涙ぐむ人も見られる。8分では時間が足りないMeが多く、Coは後ろ髪を引かれる思い

をしながらも、《もっと話を聞きたいのですが、Me 全員の話聞くために時間もありませんので…申し訳ないですが、隣の人から一言よろしいですか》とまだ話が続くような雰囲気であっても切れそうな雰囲気のあるところで申し訳なさを表現して介入した。

Me の感想＝魅力度の平均は5.75(SD=0.62)。自由記述では F や I など、動機付けの低かった Me がグループの深まりや自分の変化について言及していた。満足したこととして A や J は改めて家族に対して考えさせられ、いい機会だったと述べていた他、「ずっと人に言えなかったことを言えてよかった」(B, I) と自己開示したことで満足感を得たようだった。また、「表面には見せないけど、皆色々な悩みを抱えて、毎日頑張っているのだから、自分も励まされた」(B) と他者理解も深まったようであった。Fac が父親世代であることで、「親の気持ちを考えた」(E)、「話を聴いているとあたたかく安心する」(H) とほっとできる存在であり、唯一年齢層が異なる Fac の異質性が Me にとって影響を及ぼしていることが見られた。なお、ファシリテーターについては、「時間がきちきちしている、もっとみんなの話を聞かせてほしい」(D, J, G) など、時間を区切っていくことに関しての不満が書かれ、両隣のレスポンスに関しては、「両隣の人に感想を言ってもらおうと決めていたので、言いやすいのもあったけど、他の人に言いたいことがあったので残念」(L) という意見が書かれてあった。

ファシリテーターの感想＝Fac「落ち着いた雰囲気の中でそれぞれが positive, negative, いろいろと自己開示している (6.5)」/Co「Me が話せる範囲で普段話せないことを話せてよかったと思う。時間を切っていた事をみんながどう思っているか気がかり (6)」

※時間に対する不満については、腹八分がちょうどよく、着陸態勢に入ればそのまま深めずに終わるのがよいだろう。時間をオーバーさせるなどしてこちらが枠を破ってしまうのはかえって傷を残してしまう可能性があるためよくないと話しあった。

●S7 (3日目12:30-14:00)：『言葉の花束』

最後の S では、〈みんなでお互いに贈る『言葉の花束』をカードに書いて、読み上げましょう〉と Fac が説明。約50分かけて、全員一生懸命書く。その後、一人一人の前に伏せておいていき、自分がもらった分を読み、感想を一言言う。ほとんどの Me が涙を流しながら感想を言う。I と C は数枚読んだところで涙を流し、読めなくなってしまう。《感想が言えそうになったら言ってほしい》と伝えると、C は自分の時間でなんとか思いを伝え、I は最後に「うれしかった」と言うことができる。今までの S 中で伝えられなかった思いを手紙に託している者もあり、お互いサポートティブなフィードバックが行われ、あたたかい雰囲気であった。

Me の感想＝魅力度の平均は6.17(SD=0.72)。自由記述では、メッセージに勇気付けられた、嬉しかったと多くの人が記述しており、「友達って大切だと改めて思った」(C) などとフィードバックを通してよりつながりを意識できた様子が見られた。人に自分を見せることに臆病で、批判されることを恐れていた Me は「もっと知ってもらいたいと思っていることに気付けた」(L) と自分に対する気付きを記述しており、グループに入れないう感じを持っていた Me からも「人前では泣けないと思っていたけど、今は話を聞いていたら自然と涙がこぼれた」(K)、「人の感情が自分にも移ってきてすごいなと思いました」(H) と心を動かされた様子が見られた。

ファシリテーターの感想＝Fac「サポートティブな雰囲気 (7)」Co「Me の言葉に感動した。Me が時間の都合で十分感想が言えなかったことは心残り (6.5)」

3. 参加後の気持ち

Me の感想＝満足度の平均は5.96(SD=0.92)。自由記述では、「Me のことを知ることができてよかった」(C, D, E)、「同じように悩みや葛藤を抱えているんだと気付いた」(L) と他者理解の深まり、喜びの記述が多く見られた。「自分のことを話すのが苦手であったため不安だったが、だんだん自分のことを知ってほしいと思うようになった」(B) など他者とのつながりに対する気持ちの変化、自己理解が深まったという記述や、多くの人が参加したことで有意義な体験ができたという満足感が記述されていた。一方、A は「正直言わなくても良かったかもと後で思って、これでよかったのかはまだわからない。人数が多すぎて周りの人はあまり言えなかったのかも。言葉の花束はよかったけど、テーマが少し嫌かなと思う」と記述しており、「もっとフリートークみたいな感じで順番とか関係なく誰でもポンポン話せたら、もっと話しやすい雰囲気が最初から作れたのではないかなと感じた」(D)、「内面的な事を話すのには Me が多いと思いました。もっと聞きたいと思う場面やあえて聞かなくていいと思う場面がありました」(G) と Me の多さや時間の区切りという構造に対する不満が書かれてあった。また、G と K は深い話での疲れと、それをうけて自分も深く言わなければいけないのかなと思われたと記述しており、深まることへ肯定的見方と否定的見方の両方が記述されていた。

ファシリテーターの感想＝Fac「大人しい人が多いグループであったが堅実に進行した。強いて言えば、自主性がやや弱い感じか。しかしこれは構造化(例：両隣がリスポンス)のせいでもあろう (7)」/Co「枠や構造がかっちりした中で、おだやかに大切なことが語り合えた Gr だったと思う。Fac として初めてということで緊張したが、ベテラン Fac がどっしりと安心感があつたの

で安心できた(6)」

4. フォローアップ

Meの感想=有意味度の平均は5.08(SD=0.51)。自由記述では「EGによってこれまでと違う側面が見れて仲が深まった」、「一人一人がいろんなことを抱えて頑張っていることもわかったので、見方が広がった」など、人とのつきあい方の変化など日常生活に影響があったという記述も見られた。EGへの意見、要望についてはテーマの濃さや人数の多さ、話す内容があまりに私的だという意見、言葉の花束を今も大切にしているということも書かれてあった。

IV 考察

1. 半構成方式EGのプロセスについて

村山・野島(1977)は“EGプロセスの発展段階”として、段階Ⅰ：当惑・模索、段階Ⅱ：グループの目的・同一性の模索、段階Ⅲ：否定的感情の表明、段階Ⅳ：相互信頼の発展、段階Ⅴ：親密感の確立、段階Ⅵ：深い相互関係と自己直面を提言し、実際のグループはもっと複雑で不明瞭に映ること、同じグループの中でもMeによっても段階の違いがあることについても言及している。森園・野島(2006)は実施した半構成方式EGのプロセスについて、最初から最後まで意味「波のない」プロセスを辿っていると指摘し、村山・野島(1977)の“EGプロセスの発展段階”に基づいて発展段階を述べている。彼らは、実施した半構成方式EGについて、“段階Ⅰ：当惑・模索”、“段階Ⅱ：同一性の模索”、“段階Ⅲ：否定的感情の表明”という、一般的にEGの初期の段階で見られる段階があまり感じられず、S1から“段階Ⅳ：相互信頼の発展”、“段階Ⅴ：親密度の確立”、“段階Ⅵ：深い相互関係と自己直面”を少しずつ発展させていっている印象を受けるとし、その理由として、「半構成方式」の構造自体が、EGの初期段階に起こりうる危険の可能性をカットしていることが考えられると述べている。本稿で報告したグループも同様に、段階Ⅰ～段階Ⅲにおきるであろう“グループに対するぶれ”が見られなかったが、それは森園・野島(2006)が指摘するような半構成方式の“構造”によって見られるプロセスという側面だけでなく、ファシリテーターがグループの展開を見ながら設定したテーマの流れが密接に関連しているように思われる。テーマに基づいてグループの発展段階を丁寧に追っていくことは、今後半構成方式においてテーマを設定するための具体的な骨組みを提示することになると思われる。

ファシリテーターにはグループを把握する力とMeの状態を把握する力の両方が要求される(野島, 2000)が、

半構成方式はテーマによってMeの体験が大きく異なることが予想される。テーマの組み立て方、このMeにどのテーマをもってくるのが適当かを常に考えておかなければならない。坂中(2005)は構成的EGにおける心理的安全感を重視したファシリテーションの工夫として「プロセス的視点」をあげ、グループプロセスもMe個人のプロセスも単調増加といった単純な展開ではなく波打ちながらの展開であり、Meの体験が深まることもあれば、揺り戻しや充電もあることなどを考慮しながら、プログラムを構成する必要があると述べている。本グループではあらかじめ設定したテーマが適当かを順次判断しながらスタッフ・ミーティングで話しあいテーマを決定した。つまり、テーマを選択していくこと自体がグループの状態や発展プロセスと切っても切れない関係にあると考えられる。

(1) 「テーマ設定」による導入期の展開

今回実施したテーマとEGプロセスの発展段階を対応させて考えると、次のようなことが言えるだろう。まず、導入からであるが、S1に『自己紹介とEG参加への期待・不安』を持ってきたことについて述べたい。野島(2000)は、導入段階のなかでも特に大切なのはイニシャル・セッションであることを指摘し、導入期のグループの安全・信頼の雰囲気形成の技法として、丁寧な導入や、自己紹介とグループへの期待・不安の表現を提案することなどをあげている。“段階Ⅰ：当惑・模索”の段階に話されるであろう、EG参加への不安をテーマ設定で進行するという構造の中に盛り込むことで、EGに対する当惑を言語化し、順調な滑り出しを可能にしたと思われる。

(2) 「テーマ設定」による展開期の展開

次に、青年期の発達課題である、将来への展望や、仲間関係、異性関係の捉え方をテーマにしているが、これは対象が看護学生であることで発達課題を意識したこと、看護学生のEGのねらいによって決定したものである。安部(1980)は看護学生のEG体験の意義として、自発性の経験、看護師としてのアイデンティティの試し、仲間関係の見直しと親密感の増大、おとなになるための条件、の四つを指摘している。このうち、特にS2『私の進路をめぐる過去・現在・未来』は看護師としてのアイデンティティの試しをねらったものであり、S2で「悩んでいるのが自分だけではないことがわかってよかった」とのアンケートからもわかるように、またそれが仲間関係の見直しと親密感の増大につながっていると思われる。これらは現在、看護学生としての道を同じくしている同志として共通性を感じやすいテーマであり、“段階Ⅳ：相互信頼の発展”と、“段階Ⅴ：親密度の確立”の入り口に立てるようなテーマであったと思われる。

しかし、S2で入り込めないMeもあり、S3では少人数

の方がいいという意見もアンケートに書かれていた。S3以降もでてくる人数に関する不満はMeの心の壁を表していると思われ、構造化に対する不満と思われた。それらの不満をグループの中で発散させる意味でもテーマの組み立てにおいて貢献しているのがS4『野外EG』であろう。スタッフ・ミーティングにて筆者らも感じているが、20歳前後の若者がずっと同じ部屋でじっと話して過ごすということに耐えられないMeも多いと思われ、特に、動機付けの低い研修型EGであれば、中田(1999)が“逸脱行動”と呼ぶような行動化が多いため、自分たちで行き場所を決め、各々が自由に過ごすことのできるものをテーマとして盛り込むことによって、粹破りの衝動を発散させる意味を持っているものと思われる。またこのテーマによってファシリテーターとの距離の近さを感じることもつながっており、入り込めていない感覚を持つMe(S2:G, H, K)にとっても楽で、息抜きができるSであったことだろう。このように構造化の中にもクッションとなるようなSを入れることが望ましいだろう。また、息抜きがあったからこそ、S5『私のキーワード』、S6『家族』では自己理解、他者理解の深まりが見られ、Meによっては“段階Ⅳ：相互信頼の発展”、“段階Ⅴ：親密度の確立”、“段階Ⅵ：深い相互関係と自己直面”を経た者もいたと思われる。

(3)「テーマ設定」による終結期の展開

そして最終S(S7)になり、『言葉の花束』によって“段階Ⅵ：深い相互関係と自己直面”につながったと思われるが、非構成型に見られる深さと比べ、その程度は浅いことがうかがえる。『言葉の花束』は、S1～S6までMeの発言の時間が限られていることや、両隣レスポンス方式を導入したという構造面によるMeの発言へ十分に思ったことを言えなかった不満足感を取り除いてくれるものであったと思われる。本グループはMeの発言に質問や感想を言いたいがなかなかできない(S2, 3)という感想もでていたように「意見を言うことを得意とする人がいない」(J)グループであったものの、紙に書くということで最後にメッセージをMeに伝えることができ、Meに受け入れられた感じや勇気付けられた感じをもっていたようだ。それは形に残るということでEGのおみやげとなり、フォローアップ時に大切にしているという感想が見られた。グループと距離をとっていたMeにとっても、最後はあたたかい気持ちで終わったという感覚をもてるものだったと思われる。

(4) 半構成方式のグループ発展プロセス

以上のことから、半構成方式においては段階Ⅰの“当惑”の部分テーマとして入れて、Meの不安を言語化することで順調な滑り出しにつながり、“段階Ⅱ：グループの目的・同一性の模索”、“段階Ⅲ：否定的自己の表明”が構造的にカットされ、人によっては“段階Ⅵ：深い相

互関係と自己直面”に至ったと思われる。しかし、安全感を高め、段階Ⅱ、Ⅲがカットされている分、Me、グループが“模索”する部分をファシリテーターがリードし、Meの自発性を構造的に尊重できなかったため、その構造に対しての不満が後半になってアンケートに記述されるという形で表現されている(S3, 5, 6, 参加後)。時間や空間に対する不満はグループが動かないことへの不満が投影されていることが推測され、特に半構成方式においてはその構造を批判し、グループの動かなさを構造のせいにするのでどうにか不満を解消しようとしていると捉えることができるだろう。それをアンケートに書くことができるということは、ファシリテーターに対する信頼があつてのものであり、半構成方式におけるアンケートはファシリテーターがグループの状態やMeの状態を把握するためだけでなく、アンケートに不満をぶつけ、表出することでグループの中での行動化を防ぐという意味も大きいと思われる。

つまり、半構成方式のグループ発展プロセスは、①“当惑の表現”、②“相互信頼の発展”、③“親密度の確立”、④“深い相互関係と自己直面”であり②～④を通して“構造化に対する不満の表現”が並行して持たれているということになると思われる。また、③と④は交互に繰り返されて、Me各々が進んでいくものであると思われ、人によっても発展段階は異なると考えられる。この発展プロセスは、半構成方式のメリットをいかしたファシリテーションをしていく際に参考になり、テーマを工夫する際の柱となると思われ、今後も更なる検討が必要であろう。

2. 半構成方式EGのファシリテーションについて

非構成的EGのファシリテーションのねらいとして、①グループの安全・信頼の雰囲気形成、②相互作用の活性化、③ファシリテーションの共有化、④個人の自己理解の援助、⑤グループからの脱落・心理的損傷の防止があげられる(野島, 2000)。森園・野島(2006)は半構成方式におけるファシリテーションについて安全感への配慮という視点から“構造”がもたらす影響とともに、自分のペースで話すように適宜ファシリテーターから伝えていくという工夫を報告しているが、その他具体的なファシリテーション方法を明示していない。本稿では、それらに加えて実践した半構成方式のファシリテーションについて、野島(2000)の5つの視点から本事例での半構成方式独自の工夫を考察したい。

(1) グループの安全・信頼の雰囲気形成

ファシリテーターたちは率直な自己開示や、積極的なフィードバックによって多くのMeから受け入れられている感触を持っており(S1, 2, 3)、テーマを提案することに不安や抵抗はなかった。本グループでは、Meと年

年齢に近い Co が Me にも共通する対人援助職の将来について、同じ発達課題を抱える者として迷いながら自己開示をしたことで、受け入れられており (S3), Fac が率直に語ることで親世代の本音を聞いて「親の気持ちを考えた」(S6) と自分の親と重ねあわせて見ていることもうかがえ、親しみを持っていることがわかる。安部 (2002) は既知集団の EG のファシリテーションとして自己開示の仕方に工夫があり、ファシリテーター個人と Me 全体をつなぐ構造になること、自己開示が Me 全体に受け止められるための工夫が必要であること、つまりファシリテーターにとってもメンバーにとっても無理のない自己開示から入っていく方がよいことを述べている。これは岩村 (1994) がファシリテーターに必要な能力の中で比較的重要と思われるものは、自己開示力と受容力であり、自分の体験が開示できること、そしてそれは率直な表現で皆から受け入れられやすいものであることが望ましいと述べていることにもつながるだろう。

(2) 相互作用の活性化

本事例では Me 同士のやりとりが少なく、自発的にフィードバックがおこりにくかった。そのため、ファシリテーターは積極的に率直に感想を言いながら、発言者の隣の人や、「質問したいけど自分からはできない」とアンケートで述べていた者を中心に話をふった。しかしそれでも自発的には交流がおきないため「両隣がレスポンス」をしていくのはどうか (S5) と提案し、相互交流を促した。すると、自分からは言えなかった Me から素直な意見、感想がだされるようになり、活発さが見られた。「両隣レスポンス」方式は構造化された中で活性化を行う本事例特有の工夫であったが、隣の人でなくて言いたいことがあった場合に言えなかったという記述も見られたため、最初から構造化してしまうよりは、自発性の低いグループに効果的に交流を促す手段として考えておいた方がよいと思われる。

(3) ファシリテーションシップの共有化

半構成方式であると、ファシリテーターが時間を区切るなど構造的にリードする立場をとるため、ファシリテーションシップの共有化は難しい。しかし、「両隣がレスポンス」方式は一つのファシリテーションシップの共有化であるとも言えるだろう。

(4) 個人の自己理解の援助

Me の気持ちの明確化、フィードバックを特に前半、積極的に行った。アンケートにもファシリテーターからの一言による気づき (S3) など、フィードバックに対するうれしさが語られていた。また、テーマの内容、組み立ての工夫をしていくことも必要である。本グループでは青年期の発達課題や看護師として将来に大切であると思われるテーマを用いたが、それらはグループの展開を見ながら検討していかなければならないものであろう。

(5) グループからの脱落・心理的損傷の防止

S1 は丁寧な導入で、<無理して話さなくてよいこと> を比喻を用いながら伝えた。また、安全感を高めた、この構造自体が心理的損傷の防止に役立っていると思われる。これは森園・野島 (2006) が安全感への配慮として述べていたことと同様に、「セッション中の Me 全員の発言」は脱落防止の意味をなすが、逆に発言の強制となり、「自分も言わなければいけない雰囲気になっていて、とまどった」(参加後) という意見に見られるような「させられ感」につながるため、自分のペースを守ってよいことを伝えていくことが大切であろう。また、本事例では次のテーマを気にする者がいたため、途中からではあるが独自に「テーマ予告」を行い、事前に準備をできるようにしたことも心理的損傷の防止、自己開示による傷つきの防止につながったと思われる。だからこそ、構造化された枠組みの中で、テーマが自分が話したい内容と違っていても、それぞれの Me 自らの自己開示、フィードバックができていき、ある程度の満足感につながったと思われる。

V 終わりに

本稿では、半構成方式を用いた研修型 EG の発展プロセスとファシリテーションについて述べてきた。半構成方式を用いる際、注意すべきこととして、①その集団に適切なテーマをファシリテーターが吟味しながら選択し、グループプロセスの進み方を元に提案すること、②構造的にファシリテーターがリーダーとして感じられる可能性が高いからこそ、よりメンバー化を心がけ、適切な自己開示 (岩村, 1994) をもとにグループの相互交流を促すこと、③EG 初心者ばかりで、自発性の乏しい Me が多い場合、Me の発言にフィードバックできる機会を与えること、があげられる。既知集団での研修型 EG は今後もねらいに応じたグループ構造を行うニーズが増えるであろう。今後も既知集団特有のねらいを考えたファシリテーションについて検討することは有意義なことであると思われる。

謝 辞

本稿をご校閲いただきました九州大学大学院人間環境学研究院の針塚進教授に感謝致します。また、本稿をまとめることについて承諾をいただきましたメンバーの皆様様に心より御礼申し上げます。

引用文献

安部恒久 (1980). 看護学校におけるグループ体験の意

- 義 日本心理学会第44回大会発表論文集, 641.
- 安部恒久 (2002). 既知集団を対象としたエンカウンター・グループのファシリテーション 心理臨床学研究, 20(4), 313-323.
- 平山栄治・中田行重・永野浩二・坂中正義 (1994). 研修型EGにおける困難とファシリテーションについて考える 九州大学心理臨床研究, 13, 121-130.
- 岩村 聡 (1994). ファシリテーションの体制とファシリテーター実習 —「広島」での試みを中心に— ENCOINTER 出会いの広場, 19, 12-16.
- 村山正治・野島一彦 (1977). エンカウンター・グループ・プロセスの発展段階 村山正治 (編), エンカウンター・グループ, 福村出版, 42-57.
- 森園絵里奈・野島一彦 (2006). 「半構成方式」による研修型エンカウンター・グループの試み 心理臨床学研究, 24(3), 257-268.
- 中田行重 (1999). 研修型EGにおけるファシリテーション—逸楽行動への対応を中心として— 人間性心理学研究, 17(1), 30-44.
- 中田行重 (2001). ファシリテーターの否定的自己開示 心理臨床学研究, 19(3), 209-219.
- 野島一彦 (2000). エンカウンター・グループのファシリテーション ナカニシヤ出版
- Rogers, C.R. (1970). Carl Rogers on Encounter Groups. Harper & Row
- 坂中正義 (2005). 構成的エンカウンター・グループにおける心理的安全性を重視したファシリテーション—「深めない工夫」と「プロセス的視点」— 教育実践研究, 13, 111-120.